

RM インフォメーション VOL.17 INFORMATION 2004.5

●発行 株式会社日本アルマック 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5桜井ビル4F TEL : 03-3288-2755 FAX : 03-3288-2757

5 月 号 C O N T E N T S

- 海外旅行の健康リスクマネジメント
- リスクファイナンスとしての保険活用 第16回「評価額と構造」
- 経営者のためのリスクマネジメント講座 第17回「リスク分析②」
- 時流を読む 「デフレ時代だからこそインフレ対策」

旅行先での健康リスクを予防・管理するために

海外旅行の健康リスクマネジメント

ゴールデンウィークや夏休みを、海外で過ごされる方もいらっしゃるかと思います。しかし海外旅行は国内旅行とは異なり、時差や気温の変化、天候の違い、また長時間飛行などにより体にも心にも大きなストレスがかかります。日本にはない病気にかかる可能性もあるため、慎重な準備と行動をすることが重要です。

出発前から体調を整えることは、病気の予防にとって大切なことです。持病をお持ちの方は、主治医の先生とよく相談し、常用薬などがあれば必ず準備してください。おすすめしたいのは、事前に診断書と薬の処方量を英語で書いてもらうことです。旅行先で病状が悪化した時に役立つかもしれません。また見落としがちなのが、虫歯の治療です。これは後述の海外旅行傷害保険でも免責となっているため、長期滞在の予定がある方は、一度診てもらおうとよいでしょう。

現地での病気予防として効果的なのは、食べ物の選択です。とにかく生ものは避け、加熱調理したものだけを口にしましょう。飲料水もミネラルウォーターか煮沸水を飲用するのはもちろん、氷にも気をつけましょう。缶入りミネラルウォーターに氷を入れて飲んだために下痢をしたという話もよくあります。

万一病気になったりケガをした時の、医療機関の選択も大切です。海外の公立病院は貧困層を対象としている場合が多いため、旅行会社や大使館などと相談して、信頼できる医療機関で受診するようにしてください。

また海外には熱帯を中心として潜伏期の長い病気が数多くありますが、このような病気は通常日本には存在しないので、帰国後具合が悪くなり病院へ行っても、医師の診断が遅れて命に関わることも考えられます。帰国後2ヶ月程度は、体調に異常があれば早めに医療機関で受診し、海外へ行って来たことを必ず医師に告げた上で相談してください。

海外では健康保険が適用されないため、高額の治療費は全額自己負担となります。そのため、海外旅行傷害保険には必ず加入しておきましょう。クレジットカードに保険が組み込まれている場合もありますが、補償内容が乏しい場合が多いため、事前の確認が必要です。特に医療費については十分な補償を確保しておく必要があります。

程度を問わず、病気にかかることは大きなリスクです。しっかりと対策を立てた上で、海外旅行をお楽しみください。

リスク ファイナンス としての 保険活用

第16回 評価額と構造

火災保険は長期にわたり付保し続けるものです。ですから満期になっても、つい同じ内容で更改を繰り返していませんか？。

物件に変化があっても、保険契約に反映されていない状況がよく見受けられますが、これは非常に危険なことです。

今回は、火災保険に加入する上で、確認が必要なポイントをいくつかご紹介します。

ご加入の火災保険について考えたとき、

- ①「建物の適正額」ではなく「支払ってほしい金額」で加入している
- ②金融機関に言われたまま付けている
- ③増改築をしたが、面積、構造、保険金額を見直していない

以上のようなことはないでしょうか。当てはまれば、補償内容はもちろんですが保険金額や構造などを見直す必要が大いにあると言えるでしょう。

契約時に金額の設定を曖昧にしていると、火災事故が起こったときに十分な保険金を支払ってもらえないおそれがあります。保険は曖昧なものではなく、合理的な評価を基に適正な金額が支払われるものです。つまり適正額を大きく超える金額で加入しても、その金額が支払われるわけではありません。また金額が少なすぎると、建物を再築することができないかもしれません。

適正な保険金額で加入することにより、保険料の無駄払いも避けることができます。火災保険は何十年と積み重ねていくものですから、一年分の損では済みません。多く付けすぎても損、少なく付けすぎても損なのです。

特に銀行などに借入れがあり、その関係で保険に加入しているような場合は注意が必要です。銀行は物件が全焼したときに融資分が戻ってくることを前提としており、**保険金額を低く設定している可能性**があります。火災保険に質権が付いていれば、保険金はまず銀行に支払われず。契約者には融資分を差し引いた額が支払わ

れますが、十分な補償が残っていないおそれがあります。

また火災保険においては、物件の構造を正確に告知することも重要です。保険料は構造によって料率が異なり、燃えにくい構造であれば安く、燃えやすければ高くなります。たとえば建物の外壁を張り替えただけで、保険料が変わってくることもあるのです。

しかし保険料の値上りを避けるため、実際の構造とは異なる条件で保険に加入することはもちろん問題です。いざ火災が起きたときにトラブルになるのはもちろん、場合によっては保険金が支払われないおそれもあります。

また、「うちのビルは燃えないから保険を掛ける必要がない」、という声もよく聞きます。しかし鉄筋のビルであってもボヤなどが原因で内装や家具、設備等がだめになる事例はたくさんあります。消防白書によると、**耐火物構造の建物における1年間の出火件数は6,000件を超え、1件あたりの損害額は約350万円に上ります。**これは決して無視できない数字です。

火災などの事故はめったに起きるわけではありませんから、保険に対する必要意識が低くなるのは当然でしょう。しかし保険金で何百万も損することを考えれば、仮に保険料がいくらか増えたとしても、適正な内容で加入する必要があるといえるでしょう。

補償内容の見直しや物件の評価をご検討の方は、ぜひご連絡ください。

リスクマネジメントの実践～リスク分析②

かつてGEのジャック・ウェルチ元会長が、テレビ出演した際にこのようなことをおっしゃっていました。

「現代の経営には、決断のスピードが求められる。GEは全世界に展開している。したがって、全世界から上がってくる稟議に対して、取締役会を開いている時間はない。最終的にYESかNOを決める段階で、私のところに上がってこなければならない。」

この言葉から、

- ①彼が取締役会から委任されている権限は非常に大きい
- ②即座にYES、NOの判断ができるということは、彼の側近に優秀なリスクマネジメントのプロがついており、リスクマネジメントシステムが確立されている

ということがわかります。

「リスクマネジメントとは、YES、NOの決断の手法」という話を以前書いたと思います。その決断ができるか、決断の間違いがないかが、企業にとって成長するか、倒産してしまうかの差になってきます。そのためにも、リスクの分析が必要なのです。

前回紹介したリスクマトリクスを思い出してみてください。分析の結果、リスクが「I」のゾーン（損害の強度が大きく、頻度も高い）にあれば撤退もしくは取引を中止するという決断ができますし、「II」のゾーン（損害の強度は大きいが頻度は低い）のリスクであれば、保険を手配することができれば続行する決断ができるなど、組織における決断の狂いは少なくなるでしょう。

企業における意思決定には、3段階あります。

「経営的意思決定」「管理的意思決定」「業務的意思決定」です。組織として、これらの意思決定をどのように行っていくか、リスクマネジメントシステムの構築が必要です（図参照）。

そのためには、

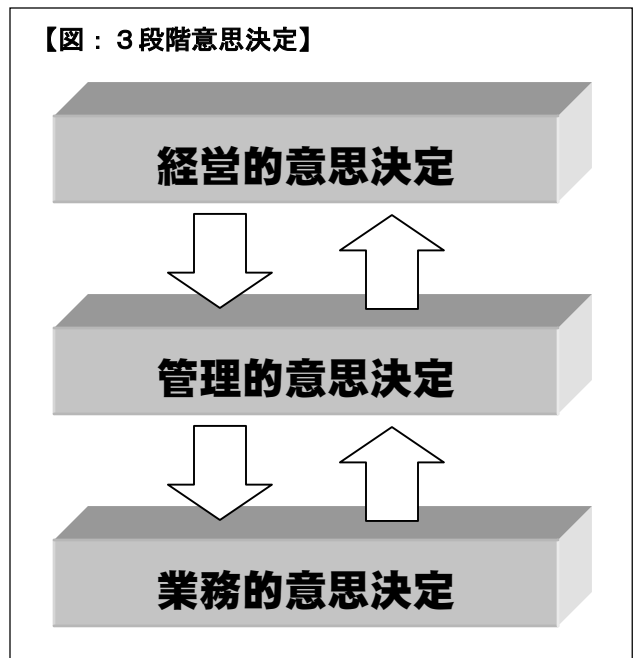
- ①リスクに対する認識
- ②リスクの存在の確認
- ③リスクがどのゾーンに存在するのか
- ④どの順番で、どんな対策を施すのか
- ⑤対策は誰が担当するのか

などを決める必要があります。

こうしたリスク分析の結果を、役員、管理職、現場の順に浸透させていき、具体的なマニュアルなどに落としこんだ対策手法を訓練していけば、かなり決断のスピードが速くなっていくはずですよ。

今回は「GEのリスクマネジメント手法」

【図：3段階意思決定】



株式会社日本アルマック 代表取締役
日本リスクコンサルタント協会 専務理事
浦嶋 繁樹

時流を読む

リスクに対する感性が高まれば、自然と時代の「先」を読む力が備わってきます。最新ニュースをリスクマネジメントの視点で分析し、今後の展開や社会への影響を予想してみましょう。

デフレ時代だからこそ インフレ対策

デフレ不況下において、顧客を確保するためには他社よりも価格を下げる必要があります。しかしその分利益が失われるため、下げるに下げられない状況を招きます。

一方インフレの場合、利益を得るにはインフレ率よりも値上げする必要がありますが、競争の中ではなかなか上げられません。在庫があれば、元の原価が安いので儲かるでしょうが、在庫が一巡すると値上げせざるを得ず、顧客が買い渋ることによってまたデフレになります。

何を言いたいのかというと、デフレとインフレの構造は同じで、どちらにしても不況に陥る可能性があるのです。そしてバブル時に平成不況の心配をしておくべきだったように、デフレの今だからこそインフレに備える必要があるのです。インフレ時には予想される金利の急上昇に、低金利に慣れた日本企業がどれだけ耐えられるでしょうか？

成長していない？ 現代社会のリスク感性

330回のミスのうち、30回が事故になり、そのうち1回は重大事故になる。リスクマネジメント用語である、ハインリッヒの法則です。

開業以来、回転ドアで32回の負傷事故を繰り返してきた「六本木ヒルズ」森タワー。この法則を知っている人間が社内にいれば死亡事故を防げたのかもしれませんが、むしろ、あの規模のビルならリスク専門のプロを数名配置させる必要があるでしょう。

また、トレーラーのタイヤ脱落による死亡事故を起こした三菱ふそうでも、やはり以前に約30件の脱落事故が確認されていたようです。

自動車がなければ自動車事故は起きません。回転ドアがなければ回転ドアの事故は起きません。つまり文明の発達は、必ず新しいリスクを生むのです。そしてそれを使いこなすには高いリスク感性が必要だということを、改めて実感させられました。

本コーナーは、(株)日本アルマック主催「全国リスクマネジメント研究会セミナー」の内容を編集したものです。セミナーの概要、参加申込方法等については、お気軽にお問い合わせください。

編集後記

インターネットを利用する上で検索サイトの存在は不可欠ですが、ここで問題です。平成16年4月現在、「Google」は気づいているのに、「Yahoo」も「Excite」も「goo」も気づいていない「気遣い」とはなんでしょう？答えは、検索語句の入力欄にあります。「Google」はページを開くと、探したい語句をすぐに入力できますが、その他はマウスを動かして入力欄をクリックしないと、入力できません。

些細なことのようにですが、スピードを重視する検索サイトにおいて、そのワンクリックは明らかに余分な作業。ユーザーの中にはストレスを感じる人もいるのでは？

我々の身近にも、わずかな気遣いが結果を大きく左右することがあるかもしれません。（米原）

RM INFORMATION 2004.5
VOL. 17

2004年5月発行 定価400円（税別）

ご意見・ご要望は上記までお寄せください。